

題を「竹山に暮らして」としているが、実は竹山という住所は無い。私たちが住んでいるところは住所でいえば富ヶ岡となる。それはそれでご利益がありそうなありがたい名前なのであるが、この富ヶ岡の範囲は東西に六キロメートル以上あり、私たちが住んでいる場所をあらわすにはちよつと広すぎる。一九五二年発行の地形図には、竹山という地名が大きく書かれているが富ヶ岡という文字は見当たらない。どうやら竹山という呼び名の方が歴史がありそうである。

古い村史を見ると、富ヶ岡は昭和十年の字名地番改正によってつけられた地名で、それまであった高台と音江別を合併したとある。そしてこの高台は文字通り地形的に高台に当り、この頂上に当る竹山十字路附近からは、遠く山々や近隣のまちを一望に見わたせることなどから、この高台の名がつけられたものとある。竹山十字路というから古くから東西南北の道が交差する高台にあったということになる。そして竹山の名称は、この辺にクマ笹が密生していたため竹山と附けられたと書かれている。クマ笹とあるが、正確にはチシマザサで別名根曲がり竹という。クマ笹とちがつて丈が三メートルになることもある大物だ。日本でいえば孟宗竹がポピュラーだが、孟宗竹が中国から持ち込まれるまではタケといえはこの根曲がり竹だったそうだ。春になると親指くらいの太さの筍が出てきて山菜として人気がある。そのため、その頃に竹山の筍を目当てに一稼ぎする人たちが大勢入り、今では立派な筍が取れる根曲がり竹は随分少なくなってしまったという。さらに昭和五十一年頃に一斉に花が咲く百年に一度とか言われる現象がおき、その後一斉に枯れてしまったとの記録もある。それでもうちの敷地の縁辺部には根曲がり竹がびっしり生えていて、そのうち東側の日当たりの良いところのものは丈も大きく、立派な太さの筍をいただくことができる。

地形的には竹山は広大な平野に舌のような形に張り出した丘陵の一番高いところに位置する。高いと言っても標高百十五メートルちよつとなのだが、他に遮るものはないので、今でもはるか遠くの山々が一望できる。春先など平地に向かつてなだらかに下る向こうに、頂きに雪が残る山々が連なる姿はいつ見ても見入ってしまう。

この丘陵の一部は原始林として国の特別天然記念物に指定されており、それ以外でも森林が多く見られる。日本植生誌によれば、この丘陵はトドマツを主とする針葉樹林で下にはチシマザサが多いとされている。広葉樹林としてはハルニレーイタヤカエデ林、ミズナラーベニイタヤ林、シナノキーイタヤカエデ林、ヤチダモ林（ハシドイーヤチダモ群集）、ハンノキ林（ハンノキーヤチダモ群集）などが見られ、多様な森林があることよって、見られる植物の数も多く、都市近郊の天然林として貴重であると書かれている。私たちのすんでいるところでも、これらの樹木はよく見ることができ、野草もいろいろな種類に出会うことができる。



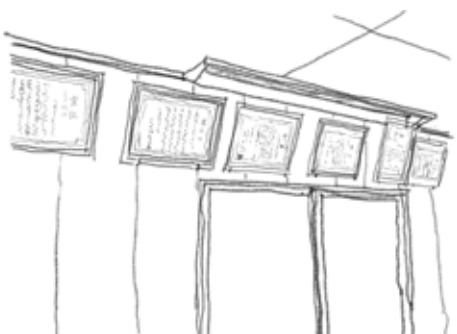
私たちが住むことになった土地は湿地状態だったと書いたが、このあたりはどうだったのだろうか。この丘陵部の地質をみると全体的に火山性の土のようだ。地層を上から見ると、火山噴出物がベースの軽石質の砂に植物が堆積してできた泥炭が挟まったものから始まり、小さな軽石を含んだ泥炭質の粘土、その下に噴火の時に流れでたり降ってきた軽石の層がつづき、さらに下は粘土やそれよりやや大きい粒のシルトに泥炭質の粘土が見られるようだ。その下は安山岩質になるが、全体的に地表に近いところは軽石や粘土が多いようだ。丘陵の先端の低地に近い方では、明治の三十年代にそこで取れる粘土でレンガを焼いていて、今でもセラミック工場が見られる。このような地質だと地表に落ちた雨水はなかなか浸透しにくく溜まりがちになり、私たちの土地も湿地状態であったのはうなづける。

このような竹山に人が入ったのは明治二十七年頃とされており、当初は根曲がり竹に混じって生えていたイタヤやカバを使って炭焼きをされていたようだ。そのうち竹山の用材も尽き、遠くに出向き炭焼きを続けるかたわら、木を切ったあとを開墾して畑をつくっていたと記録にある。当時の風景を伝える写真はないので推測になるが、高木の姿はなく勢いの強い根曲竹が一面を覆って、ところどころに開墾された畑があるという状態だったのではないかと思う。基本的に、暮らしの場として人の手が入るところに鬱蒼とした森林が残ることはない。木々に囲まれた別荘地として有名な軽井沢や、雑木林が原風景のように言われる武蔵野も、明治の頃は一面草地であつたようだ。これもそうだったのではないだろうか。

竹山にまともに入って入植するようになるのは戦後すぐの昭和二十四年から二十七年頃である。樺太から引き上げて来られた方や、引き上げて他の地に新しい暮らしを求めてうまくいかなかった方などが、国から土地を斡旋されて竹山に入るのだが、それも大変だったようだ。近くにお住いのSさんは、当時のことを話されるときに普段の温和な顔とは違う表情を浮かべながら「ほんとに、あのころは辛かった。」と言われたのが印象に残っている。

国は酪農を奨励したようだった。確かに粘土質の土地で畑をつくるにしてもまともな土にするには時間がかかるので合理的な判断だったのかもしれないが、それでも斡旋された土地には一抱えもある木がたくさん生えていたそうなので、それを切つて抜根するという重労働が求められたのだ。その頃には炭焼きで一旦失われた木々がまた大きく育っていたのだろうか。切った木の根っこを抜くのはとても大変な作業だったようで、Sさんのお父さんはS式抜根機というのまでつくられたそうだ。現在、竹山に住まわれている方々の多くは、そのような苦労を経験されていると聞く。

地区の集会所になっている竹山会館の壁には沢山の表彰状が飾つてある。それらはみな農業振興に竹山地区が貢献したことを讃えるもので、一九六〇年台の半ばには苦労が少し報われるようになったことがうかがえる。



第二十回 竹山というところ (三)

そんな竹山も、一九七〇年から始まった大規模団地の造成に伴って移転を余儀なくなくなってしまった方々もいて、地域の繋がりは時とともに変わってきている。それでも今も竹山町内会として強い繋がりが残っている。現在、十六戸で町内会が構成されているが、私たちもお仲間に入れていただいている。毎年、決まった集まり事があり、コロナ禍までは年八回あった。町内の清掃などの後には小宴が催され、そこで聞く町内の昔の話や日々の出来事の話は興味がつきない。最初に私が聞いたのは、M会長のスズメバチのトラップの作り方だった。春先、少し暖かくなる連休の頃に、スズメバチの女王蜂が目覚め、巣をつくりはじめ徐々にハチの数が多くなり、それらのハチも総出で巣をどんどん大きくしていくのだそうだ。大きくなってしまった巣は素人が手を出せないくらい危険なものになる。ただでさえスズメバチに刺されると危険なのだが、巣を壊されると総出で立ち向かってくるのでへたに手を出せないのだ。そこで女王蜂が巣をつくり始める前に駆除することが重要になる。そのため捕獲器のつくり方を絵入りで解説してくれる。M会長は頼まれれば大きくなった巣の駆除もするのだが、できればみんなで巣をつくるまえに対策を取りましょうというお願いなのだ。あと、大家族のMさんの木臼で二升の餅つきをする話や、建具職人のKさんの弟子入りした親方がノミを研いだら立てて倒れなかったという話など、ホホウという話ばかりだ。

年中行事のなかに竹山神社祭というのがある。竹山で標高が一番高いあたりに竹山神社はある。市史によると最初は小祠で春日大社と書かれた木札と鏡一対が祀られていたが、明治三十八年(一九〇五年)に、縁あつて毘沙門天を合祀して、眺望の良い現在地に創立されたとある。一九九八年には建て替えら鳥居のある現在の姿となつている。今は、神社のまわりはすっかり木々に覆われているが、木々が無かつた頃は、山並みが一望できたようだ。竹山神社祭といつても特に神事があるわけではないが、年二回、神社のまわりの落ち葉を掃除し、お供えをして町内皆でお参りするのだ。そのほかに年が開ける深夜に皆で初詣するのを欠かしたことがないと聞く。町内会では建具職人のKさんが神社担当として行事の仕切りをされている。毎年、神社会計の報告もされるのだが、お賽銭も結構な額になることから、この地域だけでなく広くお参りに来られる方がいるということだ。

ここは、最初にふれたとおり市街化調整区域に指定されている。市街化調整区域は、市街化を抑制する区域とされ、住宅の建築も厳しく規制されている。市街化調整区域というと雑木林や農地がひろがり、ところどころに資材置き場などがあるイメージだが、なかには竹山のようななれつきとした集落もある。そこには豊かな自然があり、時にはその樹木などを生活の糧にし、またその自然と闘ってきた時間の積み重ねがある。明治の中期に先人が入植して以来、数々の苦労を重ねてきた人々が互いのつながりを大切にし、地域の守り神とし神社を祀り大事にしながら暮らしているのだ。

